
地獄から始まる転生日記

アリス法式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄から始まる転生日記

【Nコード】

N9834Y

【作者名】

アリス法式

【あらすじ】

自動車に轢かれるわけでもなく、船から落ちるわけでもなく、天寿を全うした俺、そして今俺の前には、幼女様が座っておられる。

「転生したいなら、地獄に逝くのじゃー！」

確かそんな科白の元俺は地獄に堕ちました。

ああ、なぜだ幼女様ーーーーー！

「幼女様とゆうな――！」

これは、一人の男が天寿を全うしたり、魔物になって見たり、地獄に落とされたりするお話。

彼が天国にいけるのはいつになるやら。

享年98歳で地獄逝き（前書き）

あああああああ！

やっちまった、思わず書いてしまった。

はあ、とりあえず銘打つなら地獄編、どうもこうも広げた風呂敷？
でよかったつけ、をぜんぜん回収しようとしなない駄目駄目な作者で
すが。

書きたいものがあればとりあえず書くのがモットーなもので。

あああああああ。

ゴロゴロ、べき、いて

とりあえず、楽しんでいただけたらどこまでもがんばれるかもしれない
夢見がちな作者の思いつきの転生日記、地獄編楽しんでいただ
けたら続きもかけます。

享年98歳で地獄逝き

- 享年98歳

人間としては天寿を全うしたといえるだろう。

息子や娘、孫達に囲まれて俺は旅立った、新たな生、この天国へと。何だろう、死ぬ前は、記憶とかもあやふやで、幼児退行したような感じだったのに、今はすっきりしている、視力にしてもこんなに世界が広く見えたのはいつ以来だろうか。

自分の身体を見下ろしてみても、その姿は二十歳前後、数メートル歩いただけで疲れることもないし、腰を曲げてヨチヨチ歩く必要も無い、良く娘には、父さんはいつまでも若いねといわれたものだが、最後は息をするのもやっとなって感じだった。

などと考えていると、同じように歩いている人々列が無くなり、私の番が来たようだ。

何のことを言っているのかといえば、目の前、天国行き・地獄行きという二つの看板を抱えた扉の前、業務用の大きな机に座ってペタンペタンと、判子を押している幼女、ようじょ？が人々を左右の門に振り分けているようだ。

「柳堂 りゅうどう 正治享年98歳ですね」

その見た目に反しない可愛らしい声で、しかし威厳を感じさせる声で少女は俺の名前を読み上げた。

「はい」

生前では、最後のほう看護士さんの呼びかけにも答えられなかった私だが、今ははっきりと発音することができた。

「おぬし、もう生に未練は無いか」

何だろう、鈴のような声といえばよいのだろうか、そういえば孫の幼稚園の学芸会でこんな感じの声を良く聞いた気がする。

「おい、聞いておるのか」

「は、はい」

いかんいかん、少しトリップしてしまった。

ふむ、生に未練が無いかな？とな、最後のときでも思い出してみようか、周りで悲しそうに泣く孫達、その後ろでぼそぼそと会話している俺の子供達、そう、その後は、孫達に、おじいちゃんを笑顔で送ってあげましようね、と、言っていたのは長男の嫁だったかな。

その後の、孫達はバイバイおじいちゃんって、一人一人手を握って見送ってくれたっけな。

その後、子供達も目に涙を浮かべながら、元気でねって言うてくれたっけ。

笑って、言っていた長男の嫁もわずかに涙を浮かべながら精一杯笑顔で見送ってくれたね。

その胸に、大切そうに私の生命保険の契約書を抱きしめていたけど
.....。

「.....い、おい、聞いておるのか」

「は、失礼いたしました、幼女様」

「だれが、幼女様か！」

その瞳に、うつすらと涙を浮かべた幼女さんが、きつ、とこちらを睨んでいらつしやった。

「うつ、それで未練はあるのかと聞いておる」

さつさともうせ、今日の分の仕事が終わらぬでは無いか、とぶつぶつ言っている幼女様の言葉をきいて、もう一度トリップ。

「帰ってこんかー！ー！」

できなかった。

「そ、それで、みれば、ありゆのか、うぐ、ひつくひつく」

ああ、とうとう泣いてしまったようだ、泣いた幼女様もいいなー、俺の孫に匹敵するぜ！

もつと見ていたくもあったのだが、さすがに孫もいる身で、このお年頃の子供を泣かせてしまったのはなかなか罪悪感があるものだ。

「そうですね、あるといえはあります」

よしよしと頭をなでながら答えると、やっと泣きやんでくれた。

「ひつく、あるといえはとは、ひつく、ずいぶん適当な言葉じゃな、天寿を全うしておきながら、どこに未練があるというのじゃ、ひつく」

孫達の世話もしていたからな、子供のあやし方はお手のものだぜ、

「そうですね、主に最後に見た、笑顔で長男の嫁が胸に抱きしめていた生命保険の契約書とか」

「．．．．．そうか、がんばるのじゃな」

なみだ目の少女に慰められました。

「それでは、転生を希望するということまでよいのじゃな」

ようやく泣きやんだ少女様は、ごしごしと目元をぬぐうとようやく話を進め始めた。

「話が進まんのは、おぬしのせいじゃからな！」

「どうしたのですか、少女様」

少女様じゃない、となお怒られながら、とりあえず話を進める。

「それでは、進路決定じゃな」

「そんな面接のように言われても」

そついつて、少女様は二個あった判子の一個、赤黒いものでできた判子で、俺の資料にペッタンと一つ押す。

「それでは、逝ってくるのじゃ」

そう言うと共に、幼女様の背中にあつた門のひとつ地獄逝きが開いた、あれ？さつきと文字が変わつてないか。

そして幼女様の手元には、地獄逝きとでかでかと判子が押された俺の書類が。

「ええと、俺は転生するんですね」

「そうじゃ、だから地獄逝きのじゃ」

え、どうゆう事、俺何かした？

「地獄とは、罪を背負つたものが行くところなのでは？幼女様」

「ええい、うるさい！、後ろも詰まつておる、さつさと逝くのじゃ」

もう、幼女様の部分につつこんでもくれなくなった幼女様は、開いた地獄逝きの門から出てきた二人の鬼に俺を押し付けると、問答無用で、地獄の門を閉じはじめた、え？自動で開いたのに閉めるのは手動なの？

「それではの人間、せいぜい黄泉路の旅を楽しむと良いわ！」

その立ち姿に、よほどイライラがたまっていたのか似合わぬ高笑いを浮かべた幼女様を背中に俺は鬼達に両腕をもたれたエイリアン状態で、目の前を流れている川までつれてこられる。

ああ、これが三途の川か、向こう岸に父さんたちでもいるのかな、と考えていた俺の腕を鬼達はなぜか離してくれず、そのまま地獄逝き下り便と書かれた看板の横まで連れてこられた俺は、

三途の川に流された。

ええ、流されましたも、こうザザーとね。

ええー、三途の川って渡るものじゃなくて流すものだったんだ。

バイバイとやけにフレンドリーに手を振っている鬼達に、手を振り替えてから。

俺の意識はふつつりと闇におちた。

享年98歳で地獄逝き（後書き）

全略

書きたいことは全部前書きに書きました！

後書くとすれば、誤字脱字があったらお願いしますぐらいでしょうか？

え、聞くなつて？

新しい作品を書くことにめちゃくちゃになっていく、天邪鬼な作者ですが、どうかお付き合ってください。

ふむ、天邪鬼、漢字にしたらかっこいいなどこかでモンスターとして使うか？

全略と書いておいて長くなつたあとがきも終了。

暖かい声援を書いてくださったら、この物語はどこまでも続きます。

え、終わらせろつて？それは後書きを？物語を？

それは無理だね、どこまでもできる自由度を作り上げたのだから。

はははははははは！！！！

それでは、壊れかけの作者の後書きは終わります。

三途の川をどこまで逝くよ？灼熱地獄編（前書き）

いえー！

思わず、そのまま二話目も書きちゃったぜ。

さてさて、この先にどんな地獄が待っているか、

ああん、餓鬼道？、人間道？そんなの関係ないぜ、

何せ、のりで書いてるからな。

三途の川をどこまで逝くよ？灼熱地獄編

「ぬ、でかいな」

ざばー！ー！つ、そのな声と共に、俺は目を覚ます、

「おれは、生きてる！」

しかし何だこの浮遊感は、そう思っただけになにかつっぱている感覚がある背中を見れば、針と糸、糸をたどれば立派な釣竿、そしてそれを握り締めるたくましい腕の持ち主は鬼！

「やつぱり死んでる！」

「なんだ人か、リリースだな」

「しないでー！ー！ー！ー！」

そのたくましい腕でちゃんと針からはずされた俺はそのまま、川に流されそうになって、すつとぶをかけた。

「しかしな、人は食ってもうまくないんだ」

「食ったのかよ！」

お前ら、番人じゃないのかよ。

そこまで、考えて私は今の状況を思い出した、確か私は死んで、幼女様にあって、なぜか地獄逝きで三途の川に流されたつと。

「で、ここはどこだ」

「ここか、地獄だな」

「ああ、地獄だな」

目の前はまさしく地獄だった、ぐつぐつ煮えたぎる溶岩、とげとげしい剣山、光り輝く筋肉、躍動する筋肉、美しい筋肉。
溶岩に囲まれた、小高い広場の上で踊り狂う、筋肉^{マッチョ}どもがいる光景は、まさしく地獄だった。

「ぐく、ここが地獄か」

思わず生唾を飲み込む私、

「て、何で筋肉^{マッチョ}が踊りくるっとなじゃー！ー！」

「あの溶岩の暑さが、汗をかくのにちょうどいいらしい」

律儀に答えてくれた、鬼さん。ありがとうございます。

「わかるか、新入り、あいつらは己の筋肉ひとつで地獄の業火を乗り越えたんだ」

ふっ、と鬼さんはニヒルな笑みを浮かべると、

「お前も、やっていくか？」

そう私に、問いかけた。

「いや、チェンジで」

いや、私今年で98なんで、そもそもあんな乗りついていけないんで。

「あつそー、じゃ、バイバイ」

「ばいばー、て、おい、流すなー」

言葉尻を、流されたわけではありません、普通に川にリリースされました。

「次こそは、晩飯を釣り上げるか」

鬼さんは、凝り固まった背筋を伸ばすと、機嫌がよさそうにまた釣り針を川になげてのんびり座り込むのが、すでに30メートル先に見えます。

「あ、そうだ新入り、その先、滝だから」

危険だぞー、とやけに間延びした声が、徐々に速くなっていく川の速度と共にドップラー効果となって俺の耳に、

「て、遅いわー」

本日、何度目かわからない絶叫を上げて、え、まだ一度目だって？知るかそんなこと。俺は滝つぼにの向かって空を飛んだ。

ああ、昔ナイアガラを樽で下るとか、ふざけた番組があったよ
うな・・・

そんな、ことを考えながら、川から空に放り出された私は、下を見て絶望した。

「なん．．だと、滝つぼが見えないだと」

私がいる現時位置、上空数千メートル。

「ぜつぼうしたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

そんな声が、地獄の入り口に響いたとか響かなかったとか。

「あ、やべー忘れてた」

そして、鬼さんも二十歳くらいの人間が流れていった後、何かに思い当たったかのように、はっと釣り糸から意識を今さっき人間をリリースした川の方に向ける。

「この川、魚釣れないんだった」

「じゃあ、何で釣りしてるんだよー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

川の先のほうからそんな声が聞こえたような聞こえなかったような。

「ま、いいか、こうしてればまた何か釣れるだろ」

その意味は考えず、またのんびり釣りに戻る鬼さんだった。

三途の川をどこまで逝くよ？灼熱地獄編（後書き）

と、いうわけで、どういうわけだ？、知るかそんなもの。

この作品は作者が乗りとやる気と歓喜とストレスをぶち込んでない交ぜにして、書いているどこまで逝っても混沌な作品です。

いえーーーーーい！

うるさいって？、そんな反応は違う作品のところで言ってくれ、これだけはどこまでも突っ走るぜ、転生するけどチートなし、生きているけど死んでいる。

それがこの作品のモットーだ。

て、いうか、今のままならまともに転生できるかどうかも怪しいぜ。

誤字脱字感想意見お待ちしています。

あと、主人公をどこまでもいじめたいって方、こんな地獄がいいって方、あったら書くよ、がんばるよ。

どこまでだってがんばるよ。

皆の声援を糧に生きてます。

何かありましたら、書き込みお願いいたします。

それでは、次回も天寿を全うしたはずの主人公の地獄旅ごゆるりとお楽しみください。

は、幸せものが、ただじゃ死なさないぜ、え？死んでる。

三途の川をどこまで逝くよ？極寒地獄編（前書き）

ひゃほ――――！！！！

どこまでも行くよ！でもそろそろ終点だ、って早いなあい？

のりで書いているからなそんなにネタは浮かばないんだ。

そうだな、そうだね。

というわけで、地獄編ネタを提供してくれる方がいたらうれしいです。

作者が

キャほ――――！！！！！！

て、なります。

三途の川をどこまで逝くよ？極寒地獄編

ここは、どこだ？

そうだ、俺は確か三途の川をドンブラコドンブラコして、上空数千メートルから滝つばにダイブして、そして現在に至る - 証明終了。

じゃあ無くて、ここはどこだ、目を覚ました俺を包み込んでいるのは白どこまでもどこまでも白い純白の雪原。

綺麗だ、雪といったものを見るのは何年ぶりだろうか。

昔は、妻と二人で、縁側で雪が舞い落ちるのを永遠と眺めていたこともあったっけな。

気がついたら妻が冷たくなっていたが。

そう、何だろう、こう、魂が抜ける瞬間のような表情をしてカタカタと震えていたな。

そこまで、あの雪は綺麗だったということだろうさ。

しかし、なんだこう地獄でこんなにのんびりとしていても良いのだろうか。

そう、なんだ、向こうで震えている方々みたいに、私もブルブルしないといけないんじゃないのかね。

「ああーーーーー、ガチガチ」

そうそう、こんな感じではを打ち鳴らしてね。

「きつくーーーーー!!!!!!」

そうそう、こんな感じに絶叫しながらね。

「もっともつとだ、もっと俺に痛みをくれーーーー!!」

そうそう、こんな感じに、て!おい、なんだいまの変な声が混じってなかったか?

ていうか、よく見たらなんだこの光景、馬上鞭をもって女王様スタイルのガチムチの男鬼に、たくさんお人間達がぶつたたかれながら悶えている。

そして、ぶつたたいていた鬼達も俺の、ことに気がついたのかこっちに歩いてきた。

「よう、新入り」

その、格好にまったくそぐわない洪いいい声です。

「ええ、こんにちは、鬼さん」

「お前も、あのビッグウェーブを越えてきたんだろ」

ビッグウェーブ、確かに滝からは落ちたが、なんだこの違和感?

「なら、お前も目覚めたはずだぜ」

びし、っと握り締めたこぶしの親指を天に向かってあげると、女王様スタイルの鬼さま、とってもいい笑顔でおっしゃいました。

「ちなみに、何にでしょうか」

「こいつらと、同じMに」

「・・・・・・・・・・」

そうか、あの滝から落ちるとどんな人間でもMに目覚めてしまうのかー、って何でだよ。

痛みか、地面にぶつかった時の痛みか、それともあの風の層をぶち抜いたときに感じた体の裂けるようないたみなのかー！！

「すみません」

「おう、どうした新入り」

もう嫌だ、こんな女王様スタイルの鬼さまを見続けるのも、叩かれてよがっている男共を見るのも。

「私は、Mではないので、それにこの先に用があるのです」

「なん・・・・・・・・だ・・・・・・・・」

なんだ、その表情は、よほど私がMじゃないってことに驚いたのか、私はそんなにMに見えるのか？

「こいつ、筋金入りか・・・・・・・・」

「なんのことですか？」

「いや、いいんだ忘れてくれ、この先にいきたいんだな」

その、動揺のような表情に少なからず不安を覚えたが、とりあえずうなづく。

そつだ、私はこんなところで止まるわけには行かない、すべては己の未練をなくすため。

絶対に転生してみせる。

「あそこに看板が立っているだろ、あそこに向かって歩いていけ、後は勝手につくだろう」

どこか残念そうな表情を浮かべながら、あきらめたよ、っとひとつため息をつく、鬼・ザ・クイーンは俺に行くべき道を示してくれた。

「ありがとう、鬼・ザ・クイーン」

「ああ、って何のことだ？」

その質問を無視して、私は看板に向かって静かに歩いていき、

堕ちた、見事に堕ちた、看板の文字を良く見ようを踏み出した足が、見事に三途の川の上の薄い氷をぶち抜いたのだ。

三途の川、くだり、停留地点、決して足をふみこまないでください。

私は、見ることが無かったが、看板にはそうかかれていたそうなの。

「て、またかいーーーーー!!!!!!」

俺の、言葉を残して三途の川は、無常にもその流れを強めていった。

「鬼・ザ・クイーン、あいつは、まさか？」

いままで、叩かれて恍惚としていた、人間達もいまさっき来た新人に興味を持ったようだ。

「ああ、そうだまさかここまでの人材だとは」

この先は、危険地帯、むやみに足を踏み込もうとは地獄の住人である鬼達ですら思わない。

「つまり、鬼・ザ・クイーン。あいつこそ」

「そうだ、あいつこそ」

『真正のドMだ!!!!!!』

極寒地獄、通称ツンドラ地帯、Mたちの住処であり、そして、最後の地獄の良心。

つまり、この先に足をわざわざ踏み入れるやつは、真正のドMかた

だの馬鹿だった。

「ところで、お前達、いつから俺の名前は鬼・ザ・クイーンになったんだ」

『さあ？』

三途の川をどこまで逝くよ？極寒地獄編（後書き）

全略

ドンブラコドンブラコドンブランコ

は、なんか混ざったような！

まあ、いいやーーーーー！

というわけで、誤字脱字感想ご意見がありましたらお頼み申し上げます。

それでは、また次回、地獄の旅路でお会いいたしましょう。

三途の川をどこまで逝くよ？ 幻想地獄編（前書き）

ひゃほー！！！！

今日も書いたぜ、
かけたぜ今日も。

なあ、まともなストーリーないやつって書くの無理じゃね、いまさらかよ！

というわけで、がんばって少しストーリーを考えてみました。

三途の川をどこまで逝くよ？幻想地獄編

「お前様、わらわの元から離れることは、絶対に許さんからな、
たとえ、それが死であろうともな」

そう言つて、妻が笑っていたのはどれぐらい前の、話だっただろう
か。

そういつて、いた妻のほうが俺より先に天に召されやがったし、私
は地獄にきてしまったし、もしかしたらもう二度と会えないかもな
！。

とかなんとか、考えながら、私は今日もプカプカと三途の川を流さ
れている。

まあ、太陽も月も無いから、時間感覚なんてとつくの昔に狂つてし
まっているし、ここに堕ちてからどれ位経ったのなんてぜんぜん
わからない。

と、いうか、現世と同じように時間が流れているのかすらわからな
いんだから、そんなこと考えるのも無意味というものだろう。

何だろう、三途の川に流されて、極寒地帯を抜けてから、なおさら
そんな感覚が強くなった。

さつきみたいに、ふと昔のことを思い出したり、他愛も無い事でこ
んなに考え込んだり、なぜなんだ？

「不思議そうな顔していらしゃいますね、新入りさん」

土手からかけられたそんな声にふと意識を向ける、そこには座禅を組んだヤクザさんが座っていた。

「・・・・・・・・・・」

「どうしましたい？あっしの顔に何かついていますかい」

そういつて、人がよさそうな笑顔を浮かべるヤクザさん、何だろうこの人がこんな笑顔を浮かべると裏があるようにしか感じられないのだが。

「ええ、あえて言うなら、頬に傷が」

「ああ、こいつはあっしの勲章でね、勘弁してくれや」

以外に、いい人なのかもしれないな、そう思つて私は三途の川から、陸地に身体を上げると、そのままヤクザさんの隣の岩場に胡坐を組んで座り込んだ。

「お隣失礼いたします」

そういつて、よっこらしよと彼の隣に腰を下ろす。

「若いのに、何か年寄りくさい座り方をなさいますね」

「実際年寄りなんだ、享年98歳だったからな」

あはは、と軽く笑いながら、そう答えるとヤクザさんは少し驚いた顔をしていた。

「98歳ですか？とてもそうには見えませんが」

「もしかしたら、この年齢で魂の成長が止まってしまったのかもしれないですね」

「そのころに、何かあったってことですかい？」

私の言葉に、何かぴんと来たようでヤクザさんは、私にそう尋ねてきた。

「ああ、そうだね妻と会ったのがこの姿のころだったかもしれない」

「なんだ、惚気話ですかい」

苦笑を浮かべると、ヤクザさんはゆっくりと座禅をといた。

「そういえば、あなたはなぜここで座禅を組んでいたのですか」

景色が、変わったときの雰囲気からなんとなくこの地獄に予想はできていたが、彼にあえてそう聞いてみることにした。

「うすうす、気がついていられるかもしれませんが、ここは、思い出がよみがえる場所なんで見たいなんですよ、あつしの場合、いい思い出なんてトンとよみがえってきやせんがね」

「なるほど、つまり罪滅ぼしですか」

その言葉に、ヤクザさんは苦笑を浮かて答えてきた。

「さすが、人生の先輩にはかないませんね、お察しのとおり、あつしがここにいるのは現世での罪滅ぼしですよ」

一度、言葉を切ると、ヤクザさんは何かを思い出しているように思案してから、こちらに顔を向けて話始めた。

「あっしはー」

現世、元は一人の老人が住んでいた一軒屋、いま、その家には、彼の息子夫婦が移り住んでいた。

「健太君、おじいちゃんのお仏壇にお供え物を上げてくれる？」

息子らしき少年にそう話しかける、母親らしき少女。

「はい」

と、元氣のいい返事をあげている息子の姿に顔を笑顔にしている少女は、どたどたという物音に気がついて意識を扉のほうに向ける。

「いま、かえったぞー！ーだんな様」

扉を開け放つて現れたのは、昔から姿の変わらない義母の姿だった。

「義母さん、義父さんは先日亡くなりましたが」

「なんじゃと――――！」

相変わらず、元気な人だ、でも息子が驚くのと近所迷惑だからそんなに叫ばないで欲しいと、目線に込めると、軽く無視された。

「だんな様が死んだじやと、誰にやられたのじや、神か悪魔かそれともおぬしか！」

なんで、私が義父を殺さないといけないのだ、生命保険は確かにほしかったが、嫁にあそこまで優しくしてくれるおじいちゃんはなかなかいないと思うし、実際私はかなりあの人のことを慕っていた。

「いや、ただの老衰です」

「ロウスイだと！誰じゃそれは」

はあ、とことん話を聞かない人だ、なぜこんな人があんな優しい義父と結婚できたのだろう、今でも不思議に思う。

「何じゃその、私がどんな様と結婚できたのが不思議だとも言うような顔は」

「やけに、具体的な顔ですね、義母さん」

顔ひとつからそこまでの情報を読み取らないでほしい、この人は相

変わらずだ。

「ふむ、あえて言うなら既成事実じゃ」

「はあ」

そして、答えも最悪だった。

「つまり、義父の寝込みを襲ったんですね」

「ん、違うぞ、花も恥らう乙女なわしがそんなことできるはずあるまい」

乙女って、見た目は置いとしてこの人、いま何歳だと思っているのでしょう、て、言うか本当に何歳なんでしょうか。

見た目十七といったところの姑と見た目十四といった嫁の会話はまだまだ続く。

「じゃあ、どうやって既成事実を作ったんですか」

「うむ、そこはあれじゃ、適当に子供作って、『あなたの子よ』って言ったら結構あっさり」

義母さん、私の旦那は誰の子供なんですか――！

「はあ、そんなんだから義父さんに死んだと勘違いされるんですよ」

「へ、何でわらわが死んでおるんじゃ？」

はあ、この人は。

「三十年前に義母さまが失踪した後、お隣のお菊さんの看護をしていらっしやたらしいのですが」

「ふむふむ」

「十年前くらいに痴呆が始まったみたいで」

「うむ」

「お菊さんが、亡くなったときには、ご自分の奥さんが誰かわからなっていたらしくて、

長年世話をしていたお菊さんを自分の妻だと勘違いしてしまったみたいですよ」

「なんじゃとーーーーー!!」

じっさい、長年お世話をしてくれたことに、お菊さんの親族達は大変感謝してくれて、義父さまが亡くなったときに皆でお見舞いに来たくらいである。

「すまん、娘よ」

「はい、どうしました義母さん」

「ちょっと、逝って来る」

「どこに……」

がちゃん、キキーーーーーーつつつ、ドガシャーン。

扉の音、大きな車が思いっきりブレーキを踏む音、何かと衝突する音。

つて、義母さん!?

あせって、家を飛び出すと、そこにはつぶれてグチャグチャになった大型トラックと、その横で悠然と仁王立ちする義母の姿があった。

「すまない、旦那さま、トラックくらいじゃ後を追うことができません」

そういつて、亡くなった義父のために綺麗な涙を流す義母。その姿はどこまでも、ただ、美しかった。

ところで義母さま、あなたは、ナニデデキテイルノデスカ?

三途の川をどこまで逝くよ？幻想地獄編（後書き）

全略

何者なんでしょうね、この女？

俺にもわかりません、www

妻が死んだと勘違いしているというネタは前から考えてはいたので、妻をどんな感じにしようか迷って迷って現在の形に落ち着きました。（笑）

ちなみに、そのうち二人のなり染めも書きますよー

まあ、現代風に言えば二人が出会ったのは、第二次世界大戦中です。

では、ネタばれはこの辺で。

誤字脱字感想ご意見ありましたら、感想のほうに書き込みおねがいいたします。

ああ、丸一日、この話を考え続けて疲れたぜ。

以上ー証明終了。

地獄の中で 過去編（前書き）

ふいー

あれだ、まともにストーリーを考えてしまったせいで。

あまり、主人公で遊べなくなって悲しい限りだ。

ところで、誰もこの小説を日記風じゃないじゃねーか、というつつこみをしてくれなくて悲しいな。

地獄の中で 過去編

あの時代は、本当に地獄だった。

ここよりも、人の命が軽かった時代、すべてが、殺し合いのためだけにあった時代。

ぼくは、そこにいた。

いまでは、名前が変わってしまったある島、当時そこは重要な戦略拠点だったらしい。

ぼくらが、そこに派遣されたのも、まあ、当然の話だったのだらう。

大日本帝国第三特殊小隊、通称「武器を持たぬ兵士ども」

全員が、どこか異常者で作られた部隊。

ぼくらは、当時、超能力者と呼ばれていた。

「あー、どこの国のお話でしょうか」

「どうしたんですか、哲さんが私の昔の話を聞きたいとおっしゃたんじゃないませんか」

心底、不思議そうに私の質問してきたヤクザさん、改め哲さん、自己紹介をしました。

「へ、へい、流石にそこまでめちゃくちゃな人生をあゆんでいるとは、おもいませんで」

「そうですか、このくらい普通だと思いますが」

「.....」

どうしたんでしょうか、哲さんが私の顔を、異常者でも見るような目で見て来るのですが。

へ、なぜわかるかって？それは、昔散々浴びてましたからね。

「それでは」

「はい、どうしました？」

「子供のころから、その、超能力の実験みたいのを受けて育ってんですかい？」

「いえいえ、もともとは私は航空部隊に所属してましたから」

そう、私の所属は最初、海軍所属第三爆撃部隊だったのだから。

「へ、じゃあ、なんでそんな部隊に送られたんですかい？」

「湾攻撃の時の暗号文で、当時の作戦指揮官に『ネトラレ、ネトラレ』と送ったら、怒って送られてしまいました」

「・・・・・・・・」

まあ、おかげで、妻に出会えた？わけなんですがね。

山岳地帯を駆けていく、今回の作戦は、この名も無き島を焦土に変えてしまわないうちに一人の兵士を止めること。

ただ、一人の決戦兵器を連れ帰ること、それが今回私達に与えられた任務だった。

大日本帝国第三特殊小隊、そこでぼくに与えられた名前は「不運な幸運者」、まあ、なんだ、湾攻撃の時に、ぼくが乗った爆撃機に対して、迎撃に出てきた敵国の艦載機が機銃を撃とうとして、湾に間違っ爆撃したことからついた名前らしい。

ちなみに、その爆撃が最後の致命傷になったのは、ここだけの話である。

そんな、不名誉な名を貰ってから、四年、つまり私が現在の部隊で生きている時間でもある。

そして、今日が最後の日かもしれない。

いや、だって無理だろ、なにあの化け物、何で人間が素手で殴られただけで砲弾みたいにぶっ飛んでるの。

それでも、生きているやつらも大概だけでも。

そう、そこで出会ったのは化け物だった、黒いスカートに水兵の服を着た少女、片手には日本刀を持って、血溜りの中で、楽しそうに笑っている。

それが、私が出会った時の妻の姿だった。

地獄の中で 過去編（後書き）

えっと？

やっちゃった、まあ、一応、湾しか書いてないけど某パールさんです。

ああ、さっさと主人公をいじりやすい環境に戻したい。

地獄日記 キャラ説明（前書き）

なぜ、ここでと思われるかもしれませんが。

暇だったから書いただけです。

地獄日記 キャラ説明

柳堂 正治 りゅうどう せいじ

年齢 享年98歳

職業 元大日本帝国第三特殊小隊 階級は引退時で少佐・元図書館
司書

オーソドックスな日本人黒髪黒目に平凡な顔立ち、

キャラ説明執筆時、地獄でほのぼのとしている。

職業が意味がわからないという突っ込みは無しの方角で。

柳堂 椿 りゅうどう ちん

年齢 不明

職業 元大日本帝国第零歩兵小隊隊長 階級は大佐

ただし第零歩兵小隊は彼女一人だった。

現在は専業主婦だが三十年前に失踪

現在帰還するもだんなが死亡していたことにショックを受け自殺を
図るも失敗。

黒髪黒目の見た目少女、装甲は不明

柳堂 修 りゅうどう おさむ

年齢見た目不明たぶん60年くらい生きているかも

職業 図書館館長

金髪黒目で、性別が男なのと、髪の色を除けば母である椿とそっくり。

あまり、人間とかかわるのが得意ではなく、図書館の地下書庫の引きこもっている。

キャラとして作っているが、今後出てくるかは未定

柳堂 真央 りゅうどう まお

年齢 不明

薄い茶髪で、淡く赤い目

お金が大好きで、節約好き。

がめついけど、でも、情に厚い。

意外と義父である正治のことは好きであった。

松山 まつやま
菊子 きくこ

年齢 享年 83 歳

通称お菊さん、とても優しい老婦人

ただ、寒いのは苦手

孫が遊びに来たときに正治と共に孫達と遊んでいた

最後は、いろいろ勘違いした正治の腕の中で静かに息を引き取る。

ちなみに、旦那さんが正治の元同僚だったりする。

東山 とうやま
哲郎 てつろう

年齢 享年 73 歳

通称ヤクザさん

職業 極道 鉄砲玉

極道時代の異名は「不死身の鉄砲玉」横浜アヘン戦争の時に6人の親分を殺し、獄門に落ちる、頬の傷は

当時のもの。

その後、終身刑を受けるが、その受刑態度は模範受刑者に選ばれる

ほどすばらしいものだったそうだ。

最後は、看守達やほかの受刑者に暖かく見守られながら、静かに息を引き取る。

地獄日記 キヤラ説明（後書き）

次話ちゃんと話が進みます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9834y/>

地獄から始まる転生日記

2011年12月3日19時48分発行